

言語活動を取り入れた「伝統的な言語文化」の授業づくりの研究

高知県立安芸中学校 教諭 島崎 敦子

1 はじめに

本研究は、平成 26・27 年度の 2 年間にわたる高知県教育委員会の大学院派遣研修の成果である。高知大学大学院において『言語活動を取り入れた「伝統的な言語文化」の授業づくりの研究』をテーマに、作品を読み深め、「ことばの力」をつける、課題解決型の言語活動を位置つけた古典学習指導の研究に取り組んだ。それらの研究の成果を生かし、平成 28 年度に高知県立安芸中学校において取り組んだ実践の成果と課題を報告したい。

2 研究の成果と課題をふまえた平成 28 年度の実践内容

(1)平成 26・27 年度の研究成果と課題

前年度までの研究の成果は、「伝統的な言語文化」の授業において、課題解決型の言語活動を位置づけることが有効であると検証することができた点である。言語活動を取り入れた授業づくりによって、学習者は生き生きと活動し、作品を読み深めていく。言語活動を通して「伝統的な言語文化」に親しませ、「ことばの力」をつけていくことができた。一方で課題は、様々な言語活動の可能性を考察できなかった点と、言語活動によって獲得された「ことばの力」について分析し、論述することができなかった点であった。これらの成果と課題を踏まえて取り組んだ平成 28 年度の成果と課題を報告する。

(2)平成 28 年度の実践内容

勤務校である高知県立安芸中学校の 2 年生を対象に、授業の基本構想¹「個別化」「活動化」「協同化」「創造化」「発展化」に基づいた実践を行った。以下、「平家物語」の授業実践について報告する。

①授業の概要

第 1・2 次の基本（モデル学習）では主に「那須与一」の段における与一の心情を丁寧に読み取った。与一の優れた技を敵味方の別なく称賛する様子を捉え、群読によって場面の雰囲気や再現させた。その上で第 5 時に「弓流」を読んで、男を射るように命じられた与一の心情を捉え、武士の価値観や生き方について考えた。ここまではモデル学習として「与一への手紙」（参考資料 2）を示し、次時へつなげた。第 3 次は応用として 3 つの章段を取り上げて、現代語訳と古文を読んで内容の大体を捉え、人物への手紙を書いた（参考資料 3）。ノートには「人物を選んだ理由」と手紙の下書きを書かせ、手紙を清書した。第 4 次はまとめと位置付け、班で手紙を読み合い、互いの手紙に感想を書いた。

②考察

授業の基本構想「個別化」「活動化」「協同化」「創造化」「発展化」に基づいて本実践を分析、考察する。

ア 個別化

モデルとして「与一への手紙」（参考資料 2）を示したことで、学習者個々に「人物への手紙」の内容をイメージさせ、一人で学べる環境をつくることができた。また、第 3 次で示した 3 つの章段から、どの人物に共感を覚えたのか、心ひかれたのか、学習者の興味・関心によって教材を選ばせたことは、手紙を書くという学習への動機づけとなった。誰から誰に宛てた手紙を書くかも、学習者が決めた。学習者個々の視点でそれぞれ「私から木曾殿へ」「木曾殿から今井四郎兼平へ」「今井四郎兼平から木曾殿へ」「私から今井四郎兼平へ」（参考資料 3）などの手紙を書くことができたのは、個別化による学習形態の工夫があったからだと考える。

イ 活動化

教科書教材である「那須与一」の学習では与一の心情を細かく読み取り、台本をもとに群読した。見事に矢を射抜いた与一の様子や、優れた武芸に対して敵味方の別なく称賛する態度など、この場面を「男らしさ」「勇ましさ」「緊張感」「臨場感」「一体感」などのキーワードで捉え、声の出し方や立ち位置などの工夫によって表現した。その後「弓流」では一変して「五十ばかりなる男」を射た与一の仕業に非情さを感じる生徒も、武士として生きる以上当然であるとする生徒もいたが、与一の葛藤や武士として生きるために非情にならざるをえない様子を捉えることができたのは、「那須与一」の群読を通して、人物の心情を十分考えられたからではないか。また、その読み取りが、第 3 次の応用における読み取りにつながり、「人物に手紙を書く」という活動を充実したものにしたいと考える。

¹ 基本構想については『小学校国語科 教室熱中！「伝統的な言語文化」の言語活動アイディア BOOK』（渡辺春美 編著・明治図書・2012 年 12 月・p 9）を参考にした。渡辺氏は「学習者が夢中になって取り組む授業の基礎」としてア、個別化、イ、活動化、ウ、協同化、エ、創造化、オ、発展化の 5 点を挙げている。

ウ 協同化

第3次の、手紙に対する「感想の交流」が協同化を促し、作品に対する読みを深めたと考える。班の中で手紙を読み合う活動、感想を書く活動、書かれた感想を読む活動によって、他の章段の内容も理解することができた。また、自分が選ばなかった「平家物語」の人物について、自分にはなかった視点で書かれた手紙を読むことは、人物の心情の読み取りを複層化し、作品に対する理解を深めることにつながっていったと考えられる。

エ 創造化

「人物に手紙を書く」という言語活動は、読み取った人物の心情を表現するうえで学習者の抵抗感が少なく、取り組みやすかったと考える。手紙に表現された言葉には、武士の価値観や生き方に対する学習者自身の考えが表出しており、戦乱の時代にあっても人間らしい心を見せた人物たちに心を寄せ、今に生きる自分たちと共通するものを見出した様子をも見取ることができる。教科書に解説のある教材や、有名な章段、高等学校で学習する教材などを取り上げ、何よりも自分が選んだ人物に対して手紙を書くことが学習への動機づけとなって、意欲的に創造へと向かう場を作り出したと考える。

オ 発展化

教科書教材の学習を基本（モデル学習）として、応用、まとめへと言語活動を構造化し、発展化させたことによって、作品に対する理解を一層深めることができた。また、第3次で取り上げた章段は「木曾の最期」「敦盛の最期」「先帝入水」であるが、「先帝入水」については中高一貫校である本校では高校2年次に学習しており、高等学校の学習内容にもつなげることができた。

③ 考察のまとめ

考察の結果、本実践においては言語活動を通して、単元目標を概ね達成できたと考える。「人物に手紙を書く」という言語活動によって、作品を読み深めることができた。手紙を書くために、文章から人物が置かれた状況や心情を読み取るようとしている。また、自分と比較したり、時代背景を考えたりしながら読み取っている。それぞれの人物に心を寄せながら、武士の生き方について自分なりの考えを持つことができたのは、手紙という表現の形式によるところが大きいと思われる。また「書くこと」に関して、モデルとして示した手紙によって「拝啓・敬具」など手紙の形式に触れたことや、手紙の中で相手の立場を考えた言葉遣いをしようとしていることなども、これからの国語学習において生かすことができる材料であると考えている。

3 平成28年度の実践の成果と課題

本年度の「伝統的な言語文化」の授業実践については以下の通りである。

学期	作品	言語活動	※は発展的に扱った章段
1学期	徒然草	教訓を読み取り、新聞を作る	※「猫また」「くさめの尼」「聖海上人」「覆の僧正」「弓射ることを習ふに」
2学期	枕草子	随筆を書く	※「すさまじきもの」「うつくしきもの」
3学期	平家物語	人物に手紙を書く	※「木曾の最期」「敦盛の最期」「先帝入水」

1学期の「徒然草」は、平成26年度の実践を土台に、ワークシートを作り直して取り組んだ。自分が選んだ章段から教訓を読み取り、A4サイズの新聞を個人で作成した。2学期の「枕草子」では「ものづくし」の章段を読み、リライトに取り組んだ。

平成28年度の研究成果として3点を挙げる。1点目は新たに「枕草子」「平家物語」の授業実践に取り組むことができた点である。前年度の課題であった言語活動の可能性についても、「リライト」と「手紙」に取り組むことができた。2点目に、同一教材であっても反省を生かし、生徒の実態に合わせて、ワークシートを改善して取り組めた点である。「徒然草」を読み、新聞にまとめることは、生徒によっては若干難しかったが、書くことに関して自信をつけたようである。言語活動そのもの、取り扱う章段の見直し、テーマの設定など、指導者として常に生徒の実態や付けたい力によって授業を改善していく必要があることを痛感する。3点目は、本研究における授業の基本構想を現代文の学習においても応用し、取り組んだ点である。向田邦子の随筆「字のない葉書」を教材に、「基本―応用―まとめ」の授業づくりに取り組むことができた。

課題としては「枕草子」の詳細な授業分析ができなかった点である。「枕草子」は小学校で学習する内容でもあり、「随筆を書く」という言語活動に取り組むことも多い。小学校の学習内容からどう発展させるか、高等学校の学習にどうつなげていくかを考えることが必要である。そのためにも授業分析が必要であった。

これらの成果と課題を生かし、これからも実践研究に取り組んでいきたい。

4 おわりに

言語活動を取り入れた「伝統的な言語文化」の授業づくりについて、引き続き実践研究の機会を与えていただいたことに感謝し、今後も本県の国語科教育の発展のために力を尽くす所存である。豊かな学びのある国語教室を展開していきたいと考える。